

期間限定、まちは美術館

「ふくち・カメリアポート」
町を彩る文化
展示フォト
アルバム



環境にはぐくまれた町のアーティストたちの自信作

福智町文化祭作品展示 / 文化財公開

やはり、美しさや伝統が身近にある環境は、美意識や感性をはぐくむ上で特に重要だと感じました。福智町文化祭の展示作品を見て率直に思ったことである。

およそ30軒もの窯元が点在する小さなまちは、全国を探してもそう多くはない。子どもたちは成長してから気づくのだろうが、陶芸の存在はとて貴重で、そして、忘れてはならないのが福智山。あの稜線を眺めて「きれいだ」と日常思っている子どもは少ないだろう。しかし、まぶたの裏にあの姿はいつでもくっきりと映し出せる。知らないうちに環境によって培われる美的感覚は必ずあると思う。今の町の芸術家も昔はこの町で子どもだった。町のアーティストたちの作品が3会場に会した展示会では、合計約1千5百点がスラリと並んだ。夢のある作品、迫力のある表現豊かな絵画・生け花、書性的な工芸、丹精込めて育てた花・盆栽、そして瞬間を切り取った写真など、バラエティーに富んだ力作が、多くの人の目に止まった。

16 「こんなに歴史があるんだ」上野焼の沿革をみて伝統の深さを再認識、郷土を誇る国指定の伝統的工芸品・上野焼のコーナー。17 視線の先はお友だちの作品かな? じっと見入る子どもたちが多かった児童の作品展。18 しなやかな曲線で、力強さとバランスを備えた見事な枝振りの盆栽。(以上赤池会場)

12 自分たちの作品をながめる。制作に打ち込んでいたときの自分に思いをはせる。13 その時の情景と自分の感情を映し込んだ俳句。14 かわいらしい作品に、かわいらしいお客さんが集まる。子どもたちは特に、親近感がわく作品に興味を持っていた。(以上金田会場) 15 シャッターを心で押したようなステキな一枚。

9 普段は非公開になっている国の登録文化財「九州日立マクセル赤煉瓦記念館」(旧三菱芳城炭坑坑務工作室)、今回特別に一般開放された。10 老人クラブのみなさんが愛情たっぷりに育てた色鮮やかな菊、文字どおり会場に花を添えた。11 大胆かつ迫力ある表現で描かれた油絵の大作。(以上方城会場)

秋の催しで見つけた上野焼の挑戦と原点

上野焼ランブシェード展 / 福智町文化祭茶席

4百年以上の伝統を誇る上野焼、豊前小倉藩主・細川忠興が創始した大名茶陶である。幕末まで藩窯として存在した上野焼は、時代と共に趣を変え、歴代藩主の要望に応え続けてきた。

時は今、満たすべき相手は、価値観も多様なお客様。上野焼協同組合は10月20日から10日間初の試みとなるランブシェード展を陶芸館ギャラリーで開催した。若い年代、特に女性に人気で、幻想的な明かりの空間は、上野焼の新时代を思わせた。

一方、文化祭ではお点前が茶席が設けられ、お点前が披露された。茶の湯の席では、上野焼の存在感が一段と増す。訪れた人たちは、その一服に安らぎとぬくもりを覚えた。見落としてしまいそうだったが、秋の文化の催しでは、上野焼の挑戦と原点、その両方が存在していた。

5 気軽な雰囲気でお茶が楽しめた方城会場(表千家松本トシ子教室) 6 上野焼の刻印「巴」をあしらった特注の茶菓子をつるまう赤池会場(裏千家辻村栄子茶道教室) 7 伝統の作法にならったお手前が披露された金田会場(裏千家文化連豊田中茶道教室) 8 心からのおもてなしが安らぎのひとつを演出。

1 陶器からもれる明かりが、桜の花となって壁一面に咲き誇った。2 色とりどりに明かりをともした個性豊かな造形のランブシェード。3 幻想的な空間を楽しんだ上野焼ファン、伝統的工芸品の新たな一面に触れた。4 繊細な透かし彫りが和と明かりの調和を演出する。高度な技術による斬新な作品。

一流と呼ばれる作家が、身近なところで格調高い名品を生み出してきた。はるか昔から、もの作りの精神がここに息づいている。その点が、ほかの町にはない福智の強み。楽しく作ったもの、極めようと追求したもの、数々の作品が会場に並ぶ。個々の力作は個性豊かで多種多様。しかし、そのすべてに共通するのは作り手の心が込められていること。芸術の秋、町全体が美術館になった。